

歴史人口学からみた生と死 十一

鬼頭 宏

九 ライフ・サイクル

(一)

これまでみてきたさまざまな江戸時代の人口学的特徴を要約すると、短命であること、そして子ども数が多かったことにつぎると言つてよい。それではこのことが、結婚に始まり、子の出生と成長、子の結婚・独立、そして夫または妻の死亡でもって終わるライフ・サイクル(家族周期)に対して、どういうぐあいに反映

していたのだろうか。江戸時代のライフ・サイクルを復元することによつて、家族の一生に現われる現代との相違を明らかにしてみたい。

別表には、江戸時代の農村(二例)と最近のライフ・サイクルのパターンを示してある。いずれも、平均初婚年齢、結婚時の平均余命、平均出生間隔、平均出生日数をもとに導かれたものである。初婚年齢は表にもあるように、湯舟沢村の男二六歳、女二一歳、横内村の男二八歳、女一九歳、現代の男二八歳、女二五歳である。子どもの結婚年齢は、現代は右の数値を用い、江戸時代については実測された子世代の数値を利用してある。出生見数はそ

表 家族周期の重要時点における夫婦の年齢と間隔

時 点	信濃湯舟沢村 (18世紀)			信濃横内村 (18-19世紀)			現 代 日 本 (1978年)		
	夫	妻	間隔	夫	妻	間隔	夫	妻	間隔
1. 結 婚	26.4	20.6	3.1	27.5	19.1	3.4	27.6	25.1	1.1
2. 第1子出生	29.5	23.7		30.9	22.5		28.7	26.2	
3. 末子出生	46.1	40.3	16.6	43.7	35.3	12.8	30.9	28.4	2.2
4. 第1子 結婚	48.5	42.7	2.4	51.3	42.9	7.6	53.8	51.3	22.9
				54.5	48.7		58.4	50.0	
5. 末子結 婚	(65.1)	(59.3)	22.6	64.1	55.7	19.9	56.0	53.5	4.7
				(71.1)	(65.3)		(71.2)	(62.8)	
6. 夫 死 亡	62.6	(56.8)	-8.5	64.4	56.0	-6.8	74.9	72.4	16.4
7. 妻 死 亡	61.4	55.6	-1.2	(69.2)	60.8	4.8	(82.1)	79.6	7.2

(注) カッコ内は平均余命以上に生存した場合の年齢。

(資料) (鬼頭, 1981), (速水, 1933), (厚生省, 1980)。

	湯舟沢村	横内村	現代
(1)子女出生期	一九・七	一六・三	三・三
(2)子女養育期	二七・〇	二七・五	二七・六
(3)脱養育期	△八・五	△六・八	一六・四
(4)全期間	三五・〇	三六・九	五七・三

れぞれ、五人、四人、二人とし、結婚時平均
 命余は、湯舟沢村男三六・二年、女三五・〇
 年、横内村男三六・九年、女四一・七年、現
 代昭和五四年男四七・三年、女五四・五年で
 ある。

この表をさらにわかりやすくするために、
 ライフ・サイクルを、(1)結婚から末子出生ま
 での子女出生期、(2)末子出生から末子結婚ま
 での子女養育期、(3)末子結婚から夫(妻)死
 亡までの脱養育期、の三つの局面に分ける
 と、おのおのの期間の長さ(年数)は次のよ
 うになる(ただし、ここでは末子を男として
 計算してある)。

なおライフ・サイクルの歴史的变化の過程をはっきりさせるために、森岡清美（一九七三）によって紹介されている、伊藤秋子が調査した一九三〇年と一九五〇年の結婚コーホートに関する数値も、あわせてつけ加えておこう。

一九三〇年 一九五〇年

- (1) 子女出生期 一四・七 五・〇
- (2) 子女養育期 二五・五 二五・五
- (3) 脱養育期 一・六 一四・五
- (4) 全期間 四一・八 四五・〇

(二)

別表および右にまとめた数値から、江戸時代後半の農民家族のライフ・サイクルについて、次のような特徴をあげることができ

る。
まず、結婚から夫または妻の死亡までの全期間の長さは、江戸時代には三六・七年、現代よりも二〇年以上短かった。もちろんこの長さは結婚時の平均余命によって決定されている。その伸びにともなって、二十世紀にはいってから、とくに一九五〇年以

降、急速に長期化してきたことがわかる。こうして現代では、江戸時代には稀であった金婚式を祝うことができる夫婦がふえたのである。

次に、全期間の長さが伸びたのとは逆に、結婚から末子出生までの子女出生期が大幅に短縮したことを指摘しなければならぬ。江戸時代には一六〜二〇年もあったのが、現在ではその六分の一ほどになってしまった。この変化も二十世紀半ばに、急激に生じている。いうまでもなく、出生児数の減少が原因である。こうして、子女出生期の全期間に対する比率は、現代では六%でしかなくなった。江戸時代にはそれは五〇%前後を占めていて、結婚と出産・育児は分かちがたく結びついていた。

子女養育期の長さにはほとんど変化が見られないのは、右の二期間とは対照的である。この長さが子の結婚年齢によって決められるのに、江戸時代と現代との間で大きな差異がないからである。しかし、成人に達し、社会的に一人前と認められる年齢を、江戸時代には元服とすれば男子で一五歳頃であり、現代については二〇歳、または大学卒業時とすれば二二歳であるから、江戸時代のほうが五年以上短かったともいえる。

子女出生期と養育期を合わせると、江戸時代には四四〜四七年で、結婚継続期間をはるかに超えてしまう。江戸時代の夫婦は子

を生み、育てるために一生を費していたのである。現代では、結婚から末子の結婚までは三一年（末子が女子なら二八年）で、結婚期間のほぼ半分にかあたらない。

したがって、次の期間、すなわち子が結婚によって独立し巣立っていったあとの、老夫婦二人だけにもどる期間の歴史的コントラストはきわめて鮮かである。直系家族制をとるならば、後継ぎの息子夫婦に家長権・主婦権を譲り、孫たちに囲まれて過ごす期間、江戸時代の平均的夫婦にはまず与えられていなかった。末子（男子）の結婚は、父母の死亡後に行なわれるのがふつうだった。

さらに指摘しておきたいのは、江戸時代の妻にとって、夫の死亡後、未亡人である期間が現代より短かったことである。あるいは、湯舟沢村の事例に見られるように、妻の方が先立つことも珍しくはなかった。それは、夫婦の年齢開差が大きかったことと、男女の平均余命が接近しているか、男の方が長かったことと原因がある。

(三)

ライフ・サイクルにおける近世と現代のちがいは明らかである。それは特に、家族周期の長さ、その中に占める出生期間の

極端な差、そして脱養育期に現われている。そしてライフ・サイクルの変化は、長期間にわたるたびたびの出産から解放された女性にこそ、革命的ともいえる影響を与えることになった。フランスの「女性社会学」者シュルロは、それゆえに、産業革命以後の社会における女性の問題をとりあつかうにさいして、人口学的変化を強調し、これを諸変革の出発点として熱のこもった一章を書いているのである（シュルロー一九七二）。

出産からの解放がなければ、女性の自立や社会的諸分野への進出は困難であろう。古い家族制度や女性の地位・役割に対する古い考えも、それを取巻く人口学的状況と密接に関係していた。このことは当然、ライフ・サイクルの変化が、新しい女性像をつくり出さざるを得ないことを物語っているのである。

また、ライフ・サイクルにおける新旧の対比は、前回にみたような家族組織の相違とあいまって、家族成員間の人間関係にもあい異なる問題をもたらしていたであろう。

たとえば、現代の夫婦は結婚後、ごく短かい期間に子を生みあげてしまうので、親子の年齢開差は小さく、若い父母が多い。また、きょうだい間の年齢差も江戸時代より、ずっと小さくなっている。別表によれば、現代の母親は二六歳で第一子を、二八歳で第二子を生み、三人以上出産する夫婦は僅かではないから、き

ようだいの年齢差は二歳余りで接近している。これに対して江戸時代農村では、母親が四〇歳を過ぎるまで出産を続けることはふつうであったから（第五回）、長子と末子の年齢も一五歳以上離れることになる。

核家族で、年齢のより接近した両親と、年齢のちかきようだいが構成する現代家族（ニュー・ファミリー）が醸す雰囲気と、江戸時代のそれとはかなり異質であることは容易に察しがつく。きょうだい関係についていえば、現代のきょうだいは、遊び相手として、競争相手として、成長過程のうえで相当密接な関係にあるであろう。あるいは、二人きょうだいが同性である場合には、それぞれ一人っ子とかわらないという人さえある。それに対して、年齢が半世代も開いている江戸時代の長子と末子のあいだの関係は、きょうだいというより、保護と被保護の関係が強く、長子は末子にとって父母に代わる役割を演じることが多かったと思われる。湯舟沢村の例をみると、母親が死亡するのは末子がようやく一五歳になるかならないかの頃であり、父親も一六歳の頃に死亡する。そうすると、末子が結婚し、自立するまでの面倒をみるのは、すでに妻帯して同居する惣領の仕事になるであろう。江戸時代のライフ・サイクルのパターンを見て気づくもう一つの点は、現代の重要な社会問題になっている老人の位置や役割に

ついてである。最近、一人暮らし老人や高齢者の世帯が急増したのは、平均余命が伸びたことと、親子二夫婦の同居が一般的でない家族制度へ変化したことに原因がある。もし現代の家族が直系家族制をとるならば、長男夫婦と父母の同居は二〇年ほどになる。さらに母との同居は二五年にも及ぶであろう。江戸時代には僅か六十七年でしかなかった。

江戸時代には、ふつう、親が六〇歳くらいになれば家長権・主婦権が子に譲られて世代交替が行なわれたから（森岡一九七三、鬼頭一九八一）、親子二夫婦の同居がもたらす葛藤は、同居が長期化せざるをえない現代よりも深刻にならなかったのではないかと考えられる。さらに、長男以外の独身のきょうだいも同居する家族構成は複雑な人間関係のもととなっただろうが、むしろ家事労働・生産活動・育児などの面で適当な役割分担も可能であり、老人の存在は重要であったし、「生きがい」を探す必要もなかったにちがいない。

（四）

江戸時代のライフ・サイクルの観察から、まだ多くのことが言えるだろう。たとえば「惣領の一五は貧乏の峠、末子の一五は榮華の峠」という俚諺は、江戸時代の農民家族にとって実際にあて

はまることがわかる。長子が一五歳というと父親は四五歳で、下には三、四人の幼いきょうだいがいることになる。農家にとつて、この時期はもつとも労働力が薄手で、生活の苦しい時であつたにちがいない。

このようなことは一九四〇年代まで、農家にとつて実感されていたと思われる（森岡一九七三）。今日では、収入に対する生活費の割合が最も大きくなるのは、長子が大学に在学する頃である。したがつて多少の時間的ずれはあるものの、この俚諺はあてはまるものといえよう。しかし、子ども数が減少し、サラリーマン世帯が増加した現在、その実感はさほど強くはないであろう。日常生活におけるこのような諺や家族に対する常識や意識は、長い時間をかけて形づくられてきたものである。一九五〇年以降、急速に変化してきた世帯・家族の構造とライフ・サイクルのパターンに対して、われわれの意識はどの程度変わったのだろうか。今回提示した表を材料に、家族と夫婦のあり方を、もう一度考えていただければ幸いである。

（上智大学）

〔参考文献〕

速水融 一九七三 『近世農村の歴史人口学的研究』 東洋経済

新報社。

鬼頭宏 一九八一 「近世農村における家族形態の周期的変化」

『上智経済論集』二七―二・三。

厚生省編 一九八〇 『人口動態統計・昭和五三年』 厚生統計

協会。

森岡清美 一九七三 『家族周期論』 培風館

シュルロ、エヴリーヌ 一九七二 水田珠枝訳 『変革期の女性』

平凡社。

